

研修医通信 第67号2016年5月号

東京大学病院 2年次研修医

織茂 賢太

東京から電車を乗り継ぐ事約8時間、私の研修の舞台である紀南病院にやっとたどり着きました。名古屋から走る『特急ワイドビュー南紀』の窓からみる景色は、都会を抜けた後は果てしなく続く田園風景→数々のトンネルの合間にのぞくリアス式海岸と移っていき、最終的に開けたビーチに出たのがここ阿田和でした。その風景の変化を見ると、自然と「ああ、とてつもなく遠いところへ来たんだ」という気持ちがわいてきました。

病院での業務が始まりまず感じた事は、とても広い分野の診療を一人一人の医師が行っていて、そして決してどの分野に関しても疎かではないことでした。広い視野と知識をもって患者さんの全身と周囲の環境を見ることの大切さを学ぶ事ができました。同じ医療を東京で行う事はできないかもしれませんが、少なくともこのような視点を持つ事は非常に大切だと感じました。

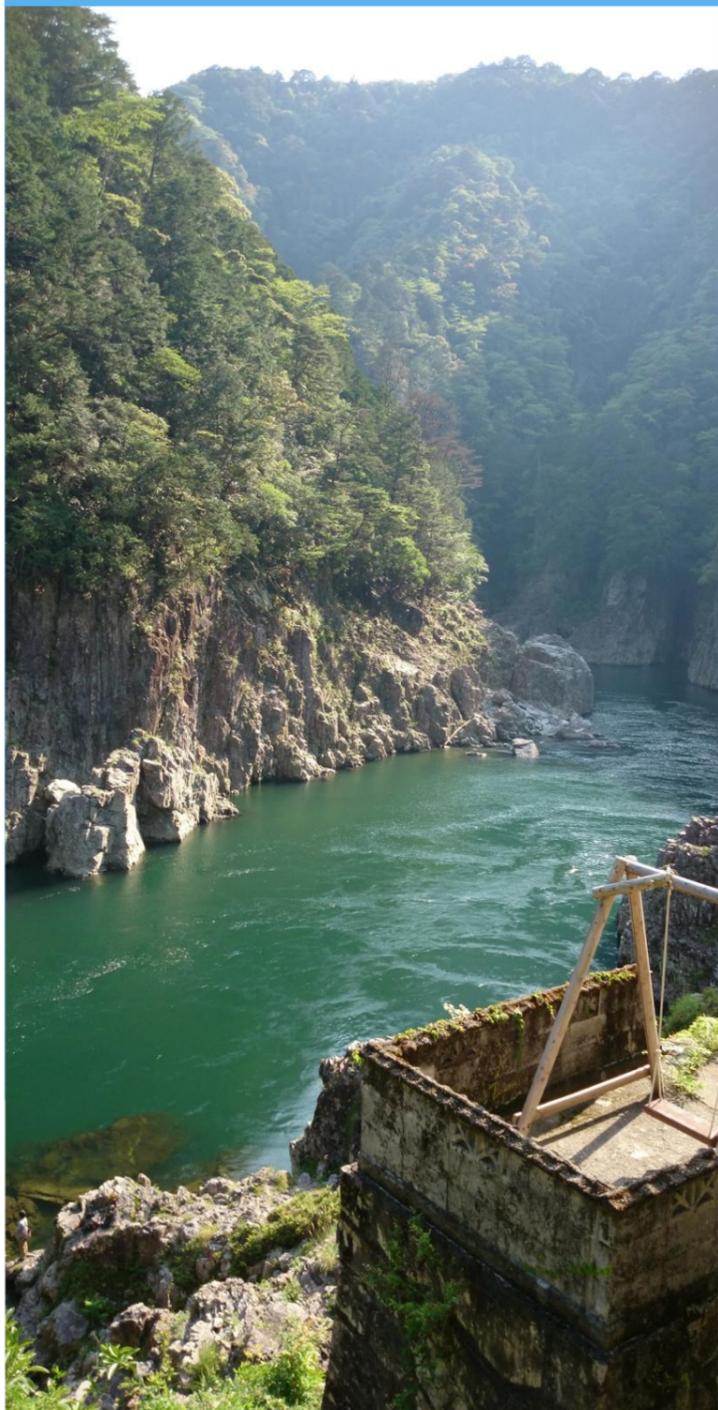
そして、この一ヶ月で最も忘れる事のできない経験が、災害ヘリに同乗したことです。ヘリコプターに乗った事は今まで無かったため、搬送をする責任を感じる反面初めての体験に対してわくわくする気持ちもありました。重症の患者さんをヘリへ運び込み、飛び立ちます。すると、その瞬間から、目の前の患者さんに対する全責任が自分にある事を実感しました。ヘリコプターのプロペラ音にかき消されて、患者さんの声は聞こえません。もちろん聴診もできません。私はひたすら何も起こらずに到着することを祈っていました。

休日は田植えをしたり、熊野三山や瀨峡などの観光スポットを巡りました。また、新鮮な海の幸をたくさん食べました。たった一ヶ月で、人生初の体験を何度したことか、数えきれません。もし後輩に地域実習の病院について聞かれたら自身を持って紀南病院を勧めたいと思います。

丁寧にご指導いただいた多くの先生方、手厚くサポートして下さったスタッフの方々、優しく接して下さった町の方々、本当にありがとうございました。



丸山千枚田



瀨峡

三重大学医学部附属病院 研修医 小林理絵

紀南病院で研修が始まり早1か月が経ちました。迷路のような病棟や慣れない方言に最初は戸惑いましたが徐々に親しみがわいてきました。食堂がとてもおいしくていつも楽しみです。私は包括的な内科を勉強したいと思いこちらに来ました。専門領域を持ちながら、内科の幅広い疾患に立ち向かう先生たちは本当にすごいなという言葉につきます。紀南病院がこの地域の最後の砦であるという責任感をひしひしと感じました。そして地域医療の醍醐味として、地域の診療所での往診やタウンミーティングへの参加など初めての経験が出来ました。患者さんのお宅や地域での過ごし方にふれて、地域の方たちどうして支えあっている様子を垣間見ることが出来ました。病棟でも1人の患者さんにたいし多くの医療従事者がお互いの役割の中で支えあっています。平均年齢が高く時に看取ることが治療になることもあり、本当にこの治療方針でよいのかいつも悩んでいます。患者だけでなくその家族や社会的背景を考慮していないことに気付かされました。

また今までは病棟搬送される立場の病院で研修していましたが、今度は自分が搬送する立場になりました。心筋梗塞の患者様を搬送する際に救急車の中では自分が冷や汗をかいていて、無事に搬送できたときは安心感とともに自分の未熟さを痛感しました。そして最後にこの地域の自然の美しさに癒されています。千枚田の田植えではその独特の地形を生かした田んぼの美しさに心惹かれました。アメンボやタガメは幼い頃から20年振り懐かしかったです。海の静けさや山々の風景など何気ない自然のたたずまいに三重県民であるのに、知らないその魅力がありました。

あと1か月間こちらでお世話になります。皆様これからもよろしくお願ひします。

